

ねりまの文化財

文化財講座抄録

石造物を訪ねて—中山道

庚申懇話会会長 小花波平六先生

(六月二七日に実施した文化財講座の内容を文化財係の責任で抄録したものです。)

中山道は、江戸の五街道のうちでも石造物の多い道である。もちろん、他の街道にも石造物がないわけではなく、かなりたくさん見られる街道もある。しかし、質・量ともにすぐれた石造物が多く、変化があるのは中山道である。明日、皆さんは戸田市付近で中山道を歩き、石造物を見ることがあるので、この講義の目的である石造物の見方や楽しみ方を具体的にするため、石造物の調べ方について話をします。

石造物を調査する前に必要なのは、まず地図をよく調べるといふことである。実際に歩いてみる前に現在の地図と江戸時代の地図の双方をくらべておく必要が

ある。日本橋から中山道を調査する場合、江戸時代の地図としては『切絵図』が参考になる。ただし、これは江戸市街しか描かれていないので、板橋付近を調べる場合は、『中山道分間延絵図』を使用する。とにかく、調査地の地図はできるだけ多く集め、調査地に対する情報を豊富にしておく必要がある。

また、調査はただ見て歩くということではなく、石造物については写真を撮りカードを作ることである。石造物を訪ねて写真を写してみても、後でこの写真なのかかわからないというのでは調査にならない。カードを作ったつぎは同じ系列の石造物を集めてみる。墓石なら墓石

委員会 課
教育係
文化財係
3993-1111 内線7141
〒176 練馬区豊玉北6-12-1

地蔵なら地蔵、庚申塔なら庚申塔というようにカードを集め、石造物の種類ごとに分類してみるのである。

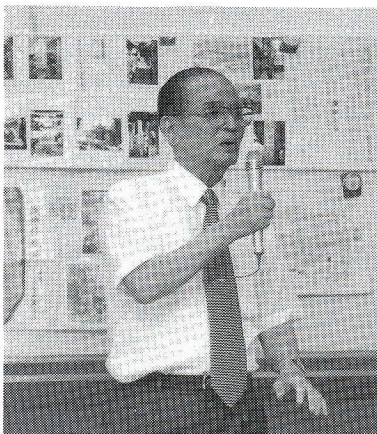
たとえば、中山道を日本橋から板橋まで歩くと、いくつかの古い墓石に行き当たる。湯島の麟祥院には春日局の墓、文京区白山の円乗寺には八百屋お七の墓、板橋駅東口には近藤勇の墓碑、板橋平尾宿の東光寺には宇喜多秀家の墓碑、板橋中宿の文殊院には遊女の墓や加賀前田家の女中のお針の師匠で若くして亡くなった薄幸の娘お静の墓がある。これらをカードにとって比較すると、春日局が出世頭であることがわかるのである。こうして墓だけ並べてみるも、一つの物語ができるが、そういう筋道を通すのが学問である。

また中山道にはたくさんさんの庚申塔があり、庚申講がさかんだったことがうかがわれる。江戸の地誌である『江戸名所図絵』にも庚申塔の絵が出てくる。話はそれるが『江戸名所図絵』に「石神井明神祠」の挿絵があり、これに江戸時代の練馬の庚申塔が描かれている。このような絵を見て、その庚申塔が今どこにあるか調べてみることも重要であろう。

さて、話を中山道に戻そう。板橋の旧宿場には、東光寺と観明寺がある。この二寺にはすばらしい庚申塔がある。青面金剛の庚申様で、二童子や猿と鶏の彫刻がついた、寛文元年(一六六一)と寛文二年のものである。

中山道を歩くと、この他にもたくさん庚申塔があり、「庚申」と漢字で書かれただけのものや三猿だけ刻んだもの、青面金剛像を刻んだものなどがある。このように庚申塔なら庚申塔というように同系列ものを分類し、場所ごとに整理し、さらに年代の古いものから順に並べると、その石造物の形がどのような変遷をとげてきたかが分かるのである。

本日は石造物の調べ方についていろいろと話をさせていただいた。明日、皆さんは戸田市・蔵市を歩き、石造物の見学をされるということであるが、自分なりの石造物の旅を記録されることを願い、本日の話の結びとしたい。

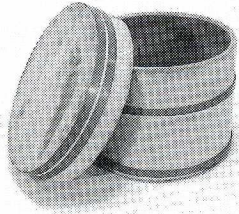


おはちと飯台 はんだい

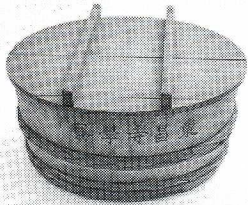
今は電気釜・ガス釜が普及し、機能や装飾性も高いので、ご飯を炊いた釜をそのまま食卓に置き、茶碗にご飯を盛る家庭も多いようです。昔は、このように釜から茶碗に直接ご飯を盛るのは「カマメシ」といって、いやしまれたものでした。ここでは、炊きあげたご飯を釜や鍋からうつして入れておく容器「めしびつ」について紹介します。

めしびつは、京阪では「おひつ」、江戸では「おはち」と呼んでいました。練馬でも「おはち」です。

おはちは、はじめ、曲物や刳物(くりもの)が用いられていましたが、普通は桶(おけ)で、竹または銅(あか)のたががかけられています。また、蓋は、江戸では、写真上段のように縁をつけたかぶせ蓋が多く、京阪では、写真中段のように縁のない棧蓋(せんたが)が普通です。桶の材料は、水湿に強い樫(かき)が使われ、



おはち



学童疎開で使ったおはち



飯台

白木地と銅たがのコントラストが映え、当時の主婦は、白木地と銅たがを磨きあげては、おはちの清潔さ、美しさを誇りにしていたといえます。

写真中央のおはちは、第二次世界大戦時、大泉国民学校第一分校(現練馬区立大泉第一小学校)が学童疎開先の群馬県勢多郡宮城村東昌寺で使用したものです。

写真下段は、おはちの一種で祝儀や人寄せ時等に用いられた「飯台」です。おはちに比べ大きく直径が五十三センチメートルもあり、頑丈で、漆塗りです。中には、家紋入りの立派なものもあります。親戚や近隣の上棟式の祝いに紅白の餅や赤飯を入れて届けたり、火災や水難などの不幸時にも炊き出しをし、握り飯を入れて見舞いに持参しました。親戚づきあい、近所づきあいに大きな役目を担っていたのがこの飯台で、農村練馬に住んでいた人々の連帯意識や協力の姿を感じとることができます。

八ヶ谷戸遺跡の発掘調査が行われました

六月二十七日から九月五日まで、大泉町二一七の陽和病院内で、縄文時代の集

落跡の発掘調査が行われました。調査は老人保健施設の建設により遺跡が失われてしまうことから、建設前に出土品を掘り出し、その記録を取るために実施されたものです。約二千平方メートルの発掘現場からは、縄文時代中期(三五〇〇〜四〇〇〇年前)の竪穴住居跡などが発見され、六千点以上の土器や石器が出土しました。

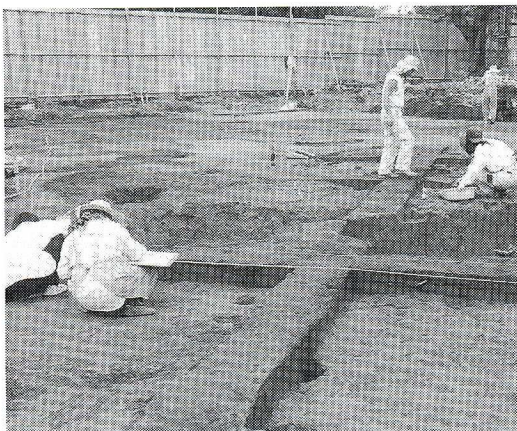
八ヶ谷戸遺跡は、白子川を西に臨む標高約四三メートルの台地端に分布しています。江戸時代、この辺りは橋戸村字八ヶ谷戸といい、そこから遺跡名が付けられました。

発掘調査では、二四軒もの竪穴住居跡の他、埋蔵(深鉢形の縄文土器を穴に埋めてあるもの)や土坑(貯蔵穴など)が発見されました。住居跡は径八メートルもある大形のものもあり、土器を埋めたものや、石囲いのある炉跡が見つっています。

この調査によって、白子川流域での縄文時代中期の遺跡としては、最も大きな部類の集落跡であることが分かってきました。今後、出土品などの整理作業を行い、報告書を作成し、遺跡の学術価値を

検討していきます。

調査が始まって間もなくの七月二二日には、橋戸小学校の子どもたちや先生・保護者の皆さん六〇名を越える方々が、遺跡を見学し、発掘調査のやり方を勉強してきました。「こんなに浅いところ(地面から約一メートル)で土器が発見されるなんて不思議!」などの声もあり、原始時代の生活を想像していました。また、八月七日には近隣の方々に是非遺跡を見学してもらいたいということで、病院主催による見学会が行われました。一〇〇名近い人が集まり、調査担当の河野重義さん(日本考古学協会会員)の話



練馬区登録文化財

相原正太郎家住宅

サポートボランティアを募集しています

平成七年三月に練馬区教育委員会では春日町五―二四の相原正太郎家住宅を有形文化財として練馬区文化財保護条例に基づき登録しました。この住宅は、江戸時代の文久二年(一八六二)に建てられた「店舗」付きの住宅であり、区内では唯一のものであります。登録後、区では文化財標識を設置し、所有者のご理解とご協力を得て、「文化財を歩く」(史跡散歩)などの際に見学を行うなど、公開に努めてまいりました。

しかし、建物は、百年以上を経ており、傷みが随所に見られ、適切な管理をしていくことが必要となってきました。そこで所有者の相原正太郎さんがこの建物を維持していくお手伝いをしていただけるボランティアの方を次のとおり募集しています。ご一緒に次の世代に大切な文化財を伝える仕事をしていただける方は生涯学習活動などにこの住宅の和室を利用することが出来ます。

▼相原正太郎家住宅の場所

練馬区春日町五―二四―八
 地下鉄二二号线 練馬春日町駅
 より徒歩三分(自動車駐車場はありません)

▼対象

第二・四水曜日の午後二時から四時頃まで時間がとれる方(歴史研究会などの団体で、参加していただける場合は、曜日・時間等のご相談させていただきます)

▼内容

雨戸の開け閉め(風を通す) 簡単な掃除

見学者への簡単な説明(無理にお願いはしません)

▼申込

電話で十月末日までに練馬区教育委員会文化財係までご連絡下さい ☎(三九九三)一一一一 内線七二四一

※文化財係では相原さんとボランティア希望者の橋渡しをします。

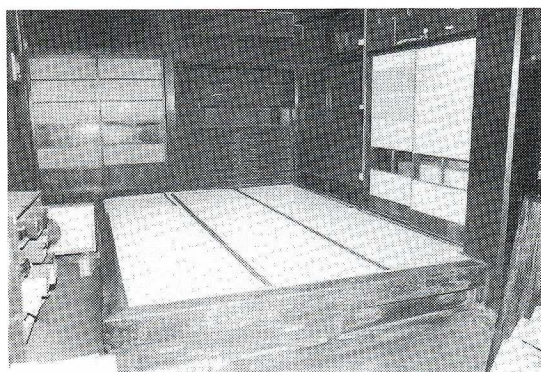
相原正太郎家住宅の概要

江戸時代の上練馬村にあった半農半商の建物で、「みせ」の北側の鴨居上に作られている造り付けの神棚の飾りに文久二年(一八六二)六月銘が墨書されました。

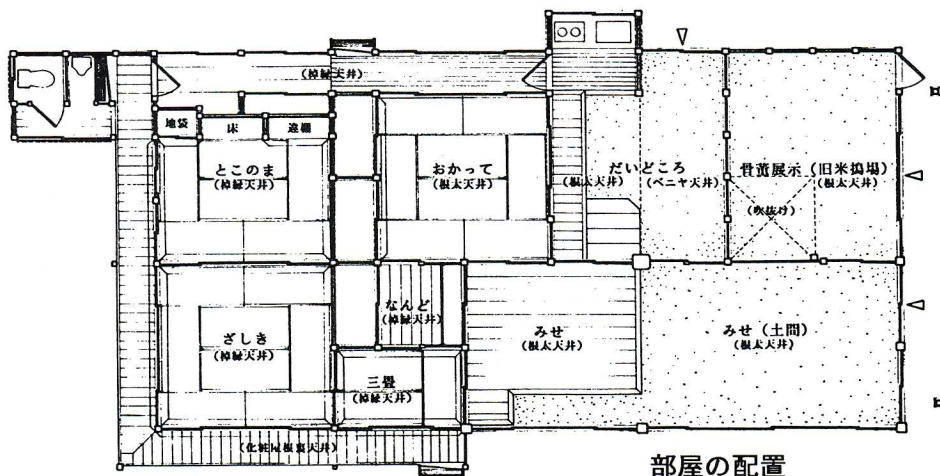
桁行八・五間(二六・三六メートル)、梁間四間(七・二七メートル)、寄棟造り、茅葺きの建物です。現在は茅葺きの上に鉄板を被せてあり、「みせ」への出入りは妻側からですが、建築当初は平入りでした。間取りは東側の土間部分と西

側の床土部分で構成されています。土間は「みせ」、「米つき場」、「だいどころ」となっており、「みせ」には二×二間の板張り床があります。床土部分は、「三畳」、「なんど」、「おかって」の日常生活のための部屋と接客空間の「ざしき」と「とこのま」から成っています。さらに縁側が巡り、つきあたりにには便所を設けています。

上練馬村(現在の田柄・高松・春日町・貫井・向山などの地域)の江戸時代末頃の様相は家数九四軒、人口一七六五人(宗門人別書上帳・愛染院)で、米作りよりも大麦、粟、稗、大根などの生産が主だったようです。また、村内には酒、醤油、着物、菓子などを扱う商人や大工など、六〇人ほどがいました(上練馬村村方明細書上帳・長谷川家文書)。



「みせ」の部分



部屋の配置

相原正太郎家住宅は、全体的に建築当初の姿を良く残し、江戸近郊の農村として発達してきたねりまの地域における数少ない商家住宅です。

貫井の権現さまの御開帳

文化財保護推進員 岩崎 美智子

一. はじめに

南池山貫井寺円光院(貫井五十七)の本堂に子ノ聖大権現が、本尊不動明王の側にまつられています。古くから「貫井の権現さま」と呼ばれ、親しまれてきました。御開帳というのは秘仏がまつられている厨子の扉を開くことをいいます。この日ばかりは尊像のお顔を見て祈ることができます。

子ノ聖大権現は十二年に一度、子の年の月、子の日に開帳されてきました。平成八年は子年に当たり十一月二日から四日まで開帳されます。円光院では護摩供養が営まれ、稚児行列、木遣りなどが行われ、市も開かれる予定です。

御開帳の日にお出掛けになってみてはいかがでしょう。



円光院の山門

二. 円光院の草創

円光院は円長法師によって創建されたといわれています。寺の伝えによれば、円長法師は密法修行のおり腰脚の痛みを患い、治療をしましたが効果がなかった。七日間断食をして武州大鱗山の子ノ聖大権現を遙拝し、腰脚患部の平癒を祈願しました。その結果霊石を得ることが出来て、その石で患部をなでさすると痛みはたちまち快癒しました。円長法師は感きわまって、永祿七年(一五六四)に今の所に貫井寺を創建し、その近くに祠を建立し子ノ聖大権現を勧請しました。

三. 子ノ聖大権現

円長法師が祈願した子ノ聖大権現は埼玉県飯能市にあり、人々がハイキングに行ったり、小学生が遠足にいたりする所で、子ノ権現と呼ばれています。

和歌山県出身の子ノ聖が修行を積んで、大鱗山天龍寺を創建しました。その後、子ノ聖の弟子が子ノ聖大権現と崇めてそこにまつりました。子ノ権現は腰から下の病に御利益があります。円長法師の腰脚の痛みも信仰によりみごと快癒しました。

四. 貫井の権現さまの信者

円長法師が子ノ聖大権現を勧請した後、江戸時代には各種の民間信仰が盛んになりました。子ノ聖大権現への信仰も広がってきました。昔の信者の多くは農民や行商人

など、足腰を使う仕事の人たちで、甲子講(帯商人)、初音講(八百屋)、川魚講(魚屋)などの講を結衆していました。毎月子の日は「子の日の縁日」、一月の子の日は「子の日の祭り」と呼ばれ、参詣者で賑わいました。そして、参詣者をあてにした市が立っていたことが江戸時代の紀行文に書かれています。

五. 貫井の権現さまの場所

村尾正靖著『嘉陵紀行』の中に「谷原村長命寺道くさ」という章があり、正靖が文化十二年(一八一五)に長命寺(高野台三一〇)を訪れた時、貫井の権現さまを通った記述があります。

「貫井村の路の左に子ノ権現の社あり、材木の間に竹を架して、商人のものうる跡あり、とへば定れる日ありて、古き衣ものくふ器など、すべて古きものを江戸よりもて来りて、土人にひさぐと云、社は東に向ひて小祠也、」

同じ書物に「武州豊島郡東高野山行程略図」があり、円光院の前を通る道を隔てて向かい側に「子権現」が描かれています。この場所は円長法師が初めに子ノ聖大権現を勧請した場所であると思われる。この付近は今でも「ふるごんげん」として伝えられています。

六. 貫井の沼と小槌

西武池袋線の中村橋と富士見台の間の線路の北側には貫井の沼と呼ばれる沼が

あったそうです。それよりもっと昔のこと、この近くを通った旅のお坊さんがかんばんで困っている村民のために石を取り除いて水脈を見つけてくれたそうです。円長法師が祈願して得た霊石はこの水脈をふさいでいた石だといわれます。この石は小槌の形をしていたので、貫井の権現さまには小槌が奉納されました。また、腰脚の痛み平癒を祈願して、小槌を借りて帰り痛い所をなでさすり、快癒すると新しい小槌を添えて奉納するということも続いています。

七. 子ノ聖観音

円光院には観音堂があり十一面観世音菩薩がまつられ、子ノ聖観音の名で親しまれてきました。江戸時代に入って、この尊像を馬頭観音として信仰する人が増え、明治期になると、毎年旧正月一六日を「馬頭の祭り」の日とした近在の馬の持ち主が馬の安全祈願に訪れ、観音堂の周りを馬方が手綱を引いて巡る「馬かけ」の行事が行われました。

八. 現在の円光院

昭和二〇年五月二六日に第二次世界大戦の空襲により円光院の本堂、客殿、庫裏などの主な建物は焼けてしまいました。梵鐘も供出しました。その後境内は整備され昭和三八年に今日の規模に至りました。ちなみに前回の子ノ聖大権現の御開帳は昭和五九年に行われています。